「書けないということについて」

上野昂志

魯迅は、一九二七年の九月に『予想のほか』という雑感文を書いているが、その原題は『意表之外』である。内容と直接には関係ないが、この題自体ひとつの皮肉になっていて、いかにも魯迅らしい言葉の選び方だ、という感じがする。この「意表」とは意表を突くとか、意表に出るとかの「意表」で、それだけで「思の外」という意味だから、それ以上「外」をつける必要は全くない。それをわざと書いたのは誤って書いた人間に対してのあてこすりである。ずいぶんとイヤミに思えるかもしれないが、その誤った奴がタダ者じゃない。一九二四年頃口語文に反対していた林琴南である。林琴南は当時口語文を書く文学者達を非難して、彼らが口語文を提唱するのは、古文に通じてないからだ、といっていた。それが「意表の外にいず」と書いたからたまらない、早速見つけられて皮肉られた。魯迅は一九二四年の雑文「鬚の話」で一度使っている。それを三年後になっても、しかもあまり関係のないところにひょこっと出してくる。その辺が魯迅の独特な戦法であると同時に、作品表現を規定する論理であるといえるだろう。

ところでこの文章を出してきたのは、題について言いたいためでなく、その中味についてである。魯迅はここで、自分の雑感はどうしても悪口になる、ところがその悪口が悪口をいわれた方にとって有利になっているのを、今年になって発見したと書いている。どうしてかというと、魯迅の雑感が、悪口をいわれた者たちの間で「義兄弟のちぎりを結ぶ証書」になり、「俺たちは一しょだ」ということになる。又、何かうまくいかないことがあると魯迅のせいになって、悪口をいわれた方が「潔白」ということになる、というのである。

「悪口」というものは決していいものではないと誰でも考えるであろう。ところがある一部の人には有利なのだ。

人類とは結局怕るべきものである。人をかみ殺す毒蛇まで、商人はそれを酒に漬けて、「三蛇酒」だとか、「五蛇酒」だとかいって、金をもうける。

こういったやり方は、実際「交戦」よりはずっとひどいものである。私には雑感を書くこともできない。だが今度書くときは「雑感も書けない」という雑感を書く。

「こういったやり方」から「私には雑感を書くこともできない」までのところは原文を逐語的にみていくと、「こういったやり方は実際「交戦」よりひどく、(それが=こういったやり方が)私をして雑感を書けないようにする」となる。即ち、単に雑感が書けないのではなくて、「こういったやり方」によって雑感が書けなくされるのである。そこでは、漠然と「書けない」のではなく、「書けなくされている」状態と、そうさせているものがはっきりと自覚されている

のである。それは、批評としての文章が現実に対して無力であるという一般的な問題をこえて、情況にかかわっているのだ。「こういったやり方」が「交戦」よりひどく、雑感を書けなくするとは一体どういうことか。あからさまな論争を交えるならば、敵の言葉を打ち砕くこともできよう。あるいは又、そのことを通じて他者の幻想を突き破るかもしれない。だが自分の投げかけた言葉が敵にとりこまれ「利用」されてしまったら、批評も又自慰にすぎない。それは効用の問題などではない。批評とし自立するか否かの問題である。情況が強いてきたのはそのことである。それに対して魯迅は、「雑感も書けない」という雑感を書くと切り返す。書けないならば、書けないということを書く以外にはない。書けないという事態を回避することはできない。相対化を強いてくる情況を逆に相対化するのである。それは魯迅にとって一貫して変らない方法であった。というよりも、それこそ魯迅の存在を成立させる運動であった。だが問題は運動一般ではなく、この時それがどのような動きをしたかにある。

一九二七年は四月に蒋介石がクーデターを起こした年である。魯迅は四月十五日以後、六月に『香港略談』という雑感文を一つ書いた以外は七月に講演（「読書雑談」「魏晋の気風および文章と薬および酒の関係」）があるだけで九月までは何も発表していない。それは、「硬い刀」の横行した時期であり、魯迅が現実に生命の危険に晒されていた時期であるが、魯迅の沈黙は単にその外的情況の厳しさに由来するものではない。逆に、九月になって書かれた雑感文の苦渋に満ちた調子、書けないことを書いている屈折は、外的情況の厳しさが強いたものだけではない。

……先生、あなたは多分、読んでいられると思いますが、私は前に中国には「叛逆者のために泣こうという弔い客」がないのを歎いたことがあります。それがいまどうでしょう？あなたもご覧のとおり、この半年の間に、私は一こともそれをいったでしょうか？けれども教室では私の考えを公表したのです。けれどもそのころ私の文章はどこにも発表するところはなかったのです。けれども私は早くからもう何もいわないことにしていたのです。だがこれらのことはみな私の弁解とすることはできません。要するに、いまごろ、あのあたりさわりのない「子供を救え」（狂人日記）というような議論をまた持ち出したところで、私自身が聞いても空虚なものに思うのです。（『有恒氏に答える』）

訳文では長くなってその調子が伝わらないが、原文は、わずか二行に「けれども（雖然）」が三つ続き、そこから一挙に「要するに（総而言え）」というところへ飛びこんでいく切迫した調子で書かれている。教室では公表した。文章は発表できなかった。いや、自分は何もいわないことにした。というように想念がうねり、だがそんなことは何物でもないと、それらの想念を否定する。この魯迅内部における屈折それ自体が、書けないということを書かしている、あるいは書くことを書けなくしているモメントにほかならない。それは、「硬い刀」の横行する情況をうけとめた魯迅の、精神の軌跡であるといえるだろう。そしてそれが、自らの言葉の空虚として対象化された時、「書けない」という情況を敢て書く行為にゆかせる否定のバネとなったとおもわれる。

現在何かを書くというのはどういうことなのか。魯迅をとらえていた情況がそのまま現在に重なるわけではない。だが、書くという行為を成立させる基本的な運動には変りがないように思われる。（68年9月27日）

日本忍法伝　第二部

新・日本書紀

第4回

作・佐々木守
え・岡本颯子

第二章

鏡

（その2）

（四）

豊媛の問いに老人は答えなかった。

「あなたはどなたですか」

聞こえなかったのかと思い、こんどはゆっくりと発音してみる。

しかし、老人はやはり答えない。聞こえていないのではない。その証拠に、老人は豊媛をみつめて、ふと口を動かした。

それは、「おれは……」といったようにも見えた。「おれは……」何だ、といおうとしたのか、わからない。老人はそこで言葉をのんだのだ。

そして答えのかわりに、老人はさっきいったことをくりかえした。

「豊媛、奴国のトヨ……」

こんどは「トヨ」とはっきりいった。そういったとき、老人の目の奥に光るものが動いたように思った。それはいいようのない優しさをもった光だった。ちょうど父が成長した娘を見るときに持つあの光のようにも見えた。

老人は、豊媛をしばらくみつめると、そっと木の枝につるした鏡をはずした。そして豊媛にむかってそれをさし出した。

「お持ちなされィ」

「……」

「お持ちなされィ」

今度は老人の方が同じ言葉をくりかえす。

「どうして私が？」

「それは……」

老人はまたいちど言葉をのんだ。が今度はすぐあとをつづけた。

「これはもともとあなたのものだからじゃ」

「何といわれました」

「この鏡はあなたがもたれるべきものだと申したのです。さ、おうけとりなされ」

老人の目はいまは不気味に光っている。いや、それは豊媛にだけそう思えたのかもしれない。老人の目の光は実際はさっきとかわっていないのだ。だが、豊媛は老人のことばの中に、ものごころついてからずっと美夜日にいいきかされて来た言葉を、そして、地獄からの声のようなあの女王・卑弥呼の言葉を、重ねあわしてきいたのである。自分をいやおうなくひとつの方向に運命づけようと

するあの言葉を——
「トヨよ、豊媛よ、汝こそ邪馬台国を再興する女なのだ」
　しかし、豊媛は邪馬台国とはいったい何なのかもしらなかった。ただむかし、そういう名前の国があって、たいそう豊かに栄えていたと、それぐらいしかしらない。また、どうして自分がその国を再興しなければならないのか、いったい自分がどういう素性の女なのかもしらない。美夜日もそれはまだ話してくれてはいなかった。ただものごころついてから、豊媛はあけくれ美夜日に同じことばをささやかれて育てられた、それだけのことなのである。
　第一、「邪馬台国」といわれた国がどこにあったのか、何やらその国に因縁を持ちそうな自分がどうして奴国で育てられたのか、そういうことすらわかっていないのだ。
　だがいままた、豊媛は、幼ないときから不断に聞かされたと同じ意味のことばをこの老人からきかされた。
　この鏡は、私が持つべきものだ、と。
　老人は枯柴のような腕で、捧げもつようにして鏡をさし出している。
　豊媛はもうこの言葉の意味を追求することをやめた。こうして他人の言葉のままに、流れ、流されていくうちに、きっとわかるときもくるだろう、それが豊媛の心にきめた哀しいあきらめでもあった。
　豊媛は鏡をうけとる。しっとりと手に重い。まじまじとその表面にうつるおのが姿をみつめる。鏡面のみがかれた金属は、しかし、多少、彼女の姿をゆがめて、それでも美しく映し出してくれた。おそらく、あけくれ老人がみがきつづけたものに相違なかった。
　風に髪がゆれた。豊媛は乱れた髪をかきなでる。こうして鏡をみているとそういう動作が自然とうまれる。そして汚れ破れた衣服をあわててととのえる。
　鏡をみることは何とたのしいことだろう。彼女はいつかうっとりと自らの姿に心をうばわれる。自分の姿を美しいと思ったせいばかりではない。鏡をこうしてみつめつづけるということ自体、何か人の心をうばうものがあるのだ。
　ふとその心たのしさから、豊媛は鏡を思いっきり高くさし上げて、くるりと踊るようにまわった。
　豊媛の目の中で、鏡と、そのまわりの木立が流れるようにまわった。そして木もれ日をうけて、鏡がキラリと光った。
「ああ！」
　うめきとも歓声ともつかぬ声が老人の口からもれた。
　みると、老人は大地にひざまづいている。

「どうしたのですか」
「そのまま」
　老人はつぶやくようにいう。
「そのまま、動かないで下さい。そのまま、鏡を日輪の前に……」
　老人の目は一心に鏡をみていた。豊媛の手の中で、それは太陽をうけてまばゆく輝いている。
「ごらんなされィ、媛！　今、太陽は媛の手元に宿りましたぞ」

まさに、太陽は木々の梢から、一直線に豊媛の鏡を射、そこで反射してもう一条の光線を森の奥深くさしこませていた。

「媛よ、日輪の子よ！　さあ、私についておいでなさい。邪馬台国へご案内つかまつろうほどに」

（五）

吾作明意甚大好
上有神守及龍虎
身有文章口銜巨
古有聖人東王父
西王母渇飲玉洤
五男二女長服保
吉昌

川は森の中を流れた。

川は両岸からおおいかぶさるように枝をのばした濃い緑の木々の間を流れた。

川は豊媛と老人をのせたいかだをかるがるとのせて流れた。

いかだは、老人の桿であやつられた。

豊媛は、時々岩をかむ激流のしぶきをあびながら、掌中の鏡をみつめている。

銘があった。

銘は七言詩であった。

「そのことばの意味はおわかりかな」

老人が聞く。

「わかりません」

豊媛は答える。絵と文字であるということはわかる。文字とは、遠い海の彼方の国のことばをかきあらわしたものだということもわかる。

しかし、もちろん豊媛は文字を知らない。

「媛は月をごらんになったことがありますかな」

「あります。静かな夜など、浜へ出て月を眺めました」

そう、奴国の乙女たちと共に……。おそらく共に月を眺めた乙女たちは、今ごろは男たちの腕に抱かれ、一人前の女となっていることだろう。

豊媛の脳裡に、男の荒々しい力をうけて耐えるような、叫ぶようなすすり泣きを上げていた美夜日の姿がうかんだ。

女、という未知の世界へ第一歩をふみ出した。それは奇しくも邪馬台国という謎の世界への旅立ちでもあったのだ。

「月がどうかしたのですか」

「月のおもてに黒いかげがあるのにお気づきかな」

「気づいています」

そして、豊媛はくすりと笑った。乙女たちと、あの黒い影は、すてきな男の姿だ、などといいあってふざけた夜を思い出したのである。

「魏の国では……」

老人は、豊媛の心などとは無関係に話をつづけた。

「あのかげは、姮娥という女の姿だというておるそうな」

「女のかげ？」

「さよう。不老不死の薬を盗んだ姮娥の姿というんじゃ」

「不老不死の薬……」

豊媛の心にまた、おこりのようによみがえるおぞましい姿がある。それは、老いさらばえ、病み衰えた女王・卑弥呼の姿である。

「死にたくない。人は何故年をとるのじゃ。誰ぞ、薬をもて、不老不死の薬を！　おお！　邪馬台百か国の女王として栄えたわしにもついに不老不死の薬を手にいれることはかなわんというのか！」

血をはくように絶叫した女王・卑弥呼。

「昔……」

老人の言葉はつづく。

「前漢の頃じゃ。西王母という女がいて、世界にただひとり、不老長生の薬をもって栄えていた。西王母は漢の国の西界、崑崙山に住んでいたのじゃが、ある日、その姮娥という女が、西王母のもつ不老長生の薬をぬすんでにげたのじゃ。怒った西王母はどこまでも姮娥を追いつづけた。逃げて、逃げて、地の涯まで逃げて、ついに姮娥は月の世界まで逃げつづけたと聞く……」

豊媛は、胸に抱く鏡を見つめる。その銘文の中の、どの文字が、西王母を指しているのかはわからないが、いま、豊媛の心の中ではその西王母という不老長寿の薬を持つという神仙が、あの卑弥呼の姿と重なりあってうごめいていた。

（六）

川は流れた。

川は森の中を流れた。

葦の葉は豊媛の背よりも高く風になびいた。

その葉の間にじっと立って、鏡を

抱きしめ豊媛は待った。
丸三日、老人のいかだは川を下りつづけると、この葦原につっこむようにしてとまったのである。そして老人は「あたりをしらべてくるから、ここを動くな」と去っていったのだった。
だから豊媛は待つ。
なにを。
老人の帰るのを。どうしてあの老人とかくまで行を共にする気になったのか。いや、老人にそれほど心ひかれたわけではなかった。ただ、豊媛はひそかに期待していた。老人のつれていってくれるという「邪馬台国」に。すべてが、自分をそのように運命づけていくものならば、その命ずるままにいっそ「邪馬台国」とやらへいってみよう。その国へついたときどうするかはわからない。しかし、その国へとびこんでみなければ、また何事も始まらないもののように思えた。
バタバタと鳥の群がとび立っていく。
葦の間から老人があらわれた。
「あなた！」
豊媛は叫んだ。まだ名前もしらないのだ。そうとしか呼びようがない。その老人の腕から血が流れている。
「媛、逃げるのじゃ」
ぐいと老人は豊媛の手をひっぱった。今にもくずれ折れるのではないかと見える老人のどこにこんな力があるのだろう。
「どうしたのですか」
「いくさじゃ」
老人は走った。
豊媛もみちびかれるままに走った。葦の向こうにひとすじの煙が上がった。
「邪馬台国がおそわれているのですか」
「そのとおり……」
走りながら老人の息はぜいぜいと苦しそうに鳴った。
川にそって葦の間を走るとそこはもう海であった。老人は、海辺の岩かげに豊媛をさそった。
足元を波が洗う。
その小さなほら穴で、老人は彼女をまるでつつみこむようにしてうづくまった。
どうしてここにこういうほら穴のあることを老人は知っていたのか。それは波によってできた自然のほら穴だった。ひょっとしたら、老人は、かつてこのあたりに住んでいたのではないか、そんな疑問が豊媛の胸で頭をもたげた。
「卑弥呼さまが亡くなられてから、日輪が燃えつきたも同然だ」
老人がつぶやいた。その目に何か

遠い昔をいとおしむようなかがやきが、瞬間うかんで消えた。老人の枯れた肌は、豊媛の白い肌をつつんでぴったりとくっついていた。しかし、どうしてか、豊媛は気味悪さを感じなかった。

　はじめてあった時は、あれほど不気味に思えたのに、今はどうして？　それは三日間という日のなせるわざであったのか。いや、豊媛には何故かこの老人が、自分の父のような思いさえしている。

「鏡は？」

「これに」

　ほうーっと深い安心したような吐息が老人の口からもれた。

　豊媛は、老人の腕に身をもたせるようにしてよりかかった。

「媛」

　豊媛は、その老人の顔をあおいで、そしてちょっと唇に微笑をうかべると目をつぶった。

　どれくらいたっただろうか。静かな波の音で豊媛は目をひらいた。

　すぐ顔の上に老人の顔があった。今度は老人が少しほゝえんだように見えた。見えたというのは、見えたような感じがしたということである。

なぜなら、そのときほら穴の中はすでに暗く、もれてくる月あかりだけだったからである。

「ごめんなさい」

　こんな老人が、夜になるまで、眠る自分を支えてくれた……豊媛は心からそういって立ち上がった。

　ほら穴のすぐ外は海であった。

　豊媛は岩と水を踏んで外へ出た。

　そして思わず、声をあげた。

　はるか沖あいに、鬼火の如き火が、水平線せましとうかんでいたのである。

「不知火じゃ」

　老人がぼそりといった。

「不知火？」

「不知火じゃ。海で死んだ男の魂があぁして海をただようているのじゃ」

「……」

　豊媛はじっと沖をみつめた。波に、その火はしずかにゆれているように見えた。みつめていると、まるですーっと身体が波の上をすべって、火の方へすいよせられるような気がして、豊媛は、思わずそばに立つ老人の手をにぎりしめた。

「昔、魏へ行く船のあかりが、こ

うして海をうずめつくしたものじゃった」
「……」
「卑弥呼さまの使いとして魏国へ行く船のあかりが、海を昼間のようにそめてみせてくれたものじゃった……。そして、そのおかえしに魏から来た船のあかりも……。エイホ、エイホ、ろをこぐ生口共の声が波をわたってくると、船が来たぞ、魏の船が来たぞ、望楼の男の声が浜にひびいて、千人、二千人、一万人……老若男女が浜にあつまってかがり火をたいた。そして、そのまわりをおどりくるって船を待ったものじゃった……」

しかし、今は岩うつ波のかそけき音ばかり、豊媛には一万人などという人間の数はおよそ考えることすらできなかったが、ただ、船をまつ浜のかがり火と、それをかこんで踊る人々の姿だけは想像できた。おそらく、奴国の大漁の日の浜のようすを十も二十も集めたようなものだろうと、そんな風に思ったのである。

「その邪馬台国が、この近くにあるのですね」

老人は首をふった。

「そんな国はもうない。卑弥呼様が死んで邪馬台国は荒れにあれた。隣国はいくさをしかけ、そのまた隣りの国は生口をうばい、その隣りの国は女をつれて行き、遠くの国からも火をつけに来たり、男を奪いに来たりした。邪馬台国はもうない」

「でも、私をそこへつれていくと……」

「ぬけがらじゃ、邪馬台国のぬけがらへおつれもうすのじゃ。そして、媛に、もう一度あの昔の邪馬台国にしてもらうのじゃ」

「……」

「媛、さあ、もうひとねむりなされィ、あしたの朝、日輪と共に、媛のお国へ参りましょうほどに……」

（七）

榊の枝を老人が手折った。その枝の先に老人は豊媛の持つ鏡をしばりつけた。そして、その鏡の位置が、豊媛の顔のすぐ横になるように彼女に榊の枝を持たせた。

「よいですかな、媛、そうして、日輪に向かって歩むのじゃ」

豊媛は、太陽に向かった。

鏡が光った。まっすぐ前に、今まさに燃えんとする太陽をうけて鏡はうつくしく輝いた

「さ、参りましょう」

丘の上から老人は、豊媛の手をひいて歩き出した。

その豊媛の眼前に、突如まっ黒な光景が展開した。

丘のふもと、まだくすぶっている家々、すでに古い焼けぼっくいに変じてしまった柱、木、そして豊媛はみた。そうした焼け焦げの間を、無気力にのろのろと水がめや、穀袋を運んでいる男女の姿を――。それは奴国にいたとき、となりの国とのいくさに勝つとかならず三人か四人、多いときは十いくたりも、生口（奴隷）としてつれて来られた人々の姿に似ていた。

丘のふもとの真黒な部落は、一方で山につづき、一方で海へ下っていた。

老人がいった。

「媛、あれが、あなたの邪馬台国です」

「あれが邪馬台国！」

何ということだ。人の話にきくその国は、天にそびえる高床の倉と宮殿を持つ国ではなかったか。千人の女をしたがえた女王・卑弥呼の住む国ではなかったか。地味肥えて、穀物のみのり豊かな国ではなかったか。鳥うたい花咲き、漁もありあまるほどの国ではなかったか。

それなのに、今豊媛の眼前にひろがる光景は闇の国、死の国――これが邪馬台国！

これがわたしの邪馬台国！

その間にも、豊媛は老人にみちびかれて丘をくだりつつあった。顔のかたわらで榊の枝がゆれ、鏡はあいかわらず日輪をうけて輝いている。

やがて、焼けくすぶる部落をすぐに見下すところまで来た。

と、いきなり老人は叫んだ。いつも低く弱々しい声しか出さなかった老人は、まるでこの時のためにすべての声をたくわえていたかのように、大きな声を上げて叫んだのである。

「邪馬台国の人々よ！　日輪じゃ。わしらの日輪が来られたぞ！　見よ！　久しく待ちのぞんだ邪馬台国の日輪が、今、この国に舞い降りて来られたぞ！」

豊媛のもつ鏡は、ひときわ美しく、強烈に輝きはじめたようであった。

（つづく）

マンガに関する参考文献案内

●劇画、このマンガ界の暴れん坊　「アサヒグラフ」42年11月24日号
●マンガ・ベストセラー時代　来年はつげブーム　「内外スポーツ」12月20日号
●青年漫画雑誌をめぐって　石子順「赤旗」12月20日号
●漫画ブームに一言　近藤日出造「読売新聞」12月20日号
●諷刺を忘れたマンガ天国の住人たち　石子順造「週刊大衆」12月28日号
●若もの③漫画が"知識の泉"「東京新聞」43年1月4日号
●『漫画』誌の復活　菊地浅次郎「東京学芸大学新聞」1月22日号
●帰ってきた漫画家たち　「日本読書新聞」2月12日号
●マンガ界の明治百年　石子順造「美術手帖」3月号
●戦争と漫画　伊藤逸平「朝日新聞」3月7日号
●青年ブームとその背景　石子順造「東京タイムズ」4月1日号
●青年マンガ誌創刊の意義　石子順造「週刊読書人」4月1日号
●政治マンガは可能か　権藤晋「三田新聞」4月17日号
●漫画雑誌の普及を斬る　石子順「東京大学新聞」5月20日号
●夢想に応える青年マンガ　石子順造「サンケイ新聞」5月4日号
●マンガ　キミも読んでる!?「毎日新聞」5月20日号
●マンガを文学に近づけたい男・水木しげる「週刊サンケイ」6月3日号
●存在論的なつげマンガ　石子順造「週刊読書人」6月3日号
●開示される空間　つげ義春試論「都立大学新聞」6月28日号
●マンガは花ざかり　島村省吾「ほるぷ新聞」6月15日号
●つまらない時評マンガ　石子順造「週刊読書人」7月29日号
●学習マンガの意義　松島栄一「週刊読書人」7月29日号
●劇画ブームを斬る　峯島正行「中央公論」8月号
●写真嫌いNo.1　白土三平の素顔「宝石」8月号
●子どもはなぜマンガを好きか　副田義也「こども部屋」9月号
●つげ義春の魔術　鈴木志郎康「思想の科学」9月号

戦後漫画を糾弾し破壊する

漫画主義　第5号

発売中！

人間を相対化する思想……菊地浅次郎

連載・手塚治虫試論①
富永一郎におけるギャグとジャズ……平岡正明

フキダシについて
ギャグ・マンガ私論……石子順造

脱意識的(峠の犬)は虚構を加えて……鈴木志郎康

「あかつき戦闘隊」事件にふれて
軍国主義観批判……梶井純

狂雲の翳り……石子順造

つげ義春「ねじ式」のメモのメモ
何がメチャクチャなのか……権藤晋

「政治マンガ」と「ピンク色の離れ座敷」
暗殺者不在の暗殺マンガ……本多春雄

小島剛夕論
劇画・げきが・ゲキガ論……辰巳ヨシヒロ

■定価一五〇円（送料四五円）
左記あてお申込み下さい

本誌は、新宿・西田書店、早稲田・文献堂、大橋・いかるが書店、神田・ウニタ書房、下赤塚・波間書店、銀座・夢土画廊、大阪・青泉社でも取扱っています

漫画主義発行所・東京都新宿区十二社四二〇鹿又荘内

ガロ 臨時増刊号

異色マンガ傑作集

新しいマンガの出現により、従来のマンガの概念は、いま変質しつつある。ここに、マンガの未来を志向する先駆的な作品のかずかずを紹介!!

〈全篇書下し作品〉

風っ子　永島慎二
あいつ　滝田ゆう

ぼやけた世界　池上遼一
勝又進作品集
うみべのまち　佐々木マキ
あめりか生れのせーるろいど　林　静一

漫画寄席　藤沢光男
はにわの世界　田代為寛
恋　高橋わたる
ペシミストの死　聖　一郎

定価150円

発売中!

書店で品切れの場合は直接当社あてお申込み下さい。（〒共150円）

発行所・東京都千代田区神田神保町1－55青林堂

カムイ伝が第1回から入手できます！

愛読者の渇望に応えてバックナンバー再版

第1冊～第6冊（第1回～第12回）頒布中！

カムイ伝の第１回から第12回までを、６分冊にして再版しました。
第１冊（カムイ伝①②）から第６冊（⑪⑫）まで全巻頒布中です。
カムイ伝の再版（第一次）は、一応これでおわりました。これは、
希望者頒布・限定出版で、書店では一切発売しておりませんので、
誌代（送料含む）を添えて、直接下記へお申込み下さい。
なお、５分冊とも「ガロ」の本誌と同じＢ５判です。

頒価各冊230円 〒20円（切手も可・但し１割増）

6冊・1組 特価（〒共） 1,200円

申込先・東京都千代田区神田神保町１の55　青　林　堂

ガロ/白土三平/水木しげる/を論じた批評を収録！

ガロの世界

発売中！
定価 150円・〒30円
A5判・102頁

ガロ創刊以来、各新聞・週刊誌・雑誌・同人誌に発表されたガロ関係の論文・記事を読者の要望に応えて一冊に収録いたしました。部数に制限がありますので、お早めにお近くの書店か、直接当社宛お申込み下さい。

本書の一部内容

鶴見俊輔「ガロの世界」
藤川治水「白土三平の世界」
佐藤忠男「白土三平の漫画発想」
秋谷重男「残酷マンガと唯物史観」
渡辺一衛「子供マンガの芸術論」
山形大学工学部新聞「白土三平論序説」
日本読書新聞「白土三平氏を訪ねて」
京大新聞「役行者と白土三平」
佐々木守「ロマンの回復・カムイ伝論」
日本読書新聞「水木しげるインタビュー」
週刊朝日「怪奇マンガと水木しげるさん」
週刊大衆「幻想と怪奇を描く水木マンガ」
朝日新聞「泥絵具の幻想を復活」
大森曠児「水木しげるのグロテスクな世界」

東京都千代田区神田神保町１－55　青　林　堂「ガロの世界」係